

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 佐藤 清子

本論文は、アメリカ合衆国の「信教の自由」思想のパラドキシカルな歴史的形成過程を綿密な史料分析を通して論述したものである。「信教の自由」は合衆国憲法修正第1条から現在まで脈々と続く思想ではなく、徐々に普遍的人権としての内容を獲得したと見る方が歴史に即しているが、本論文の独創性は、19世紀前半のカトリック教徒差別・排斥運動（反カトリシズム）が逆説的にもその大きな転機となったことを明らかにしたところにある。すなわち、当時のプロテスタントは、カトリック教会は自由の敵であるという理由でこれを排斥し、その行為と修正第1条が矛盾するとは認識していなかった。しかし、カトリック教徒側の信教の自由運動との衝突、ヨーロッパ・カトリック諸国への伝道活動を経て、米国のプロテスタントは「信教の自由」をカトリックやユダヤ教徒にも与えるべき権利として認める方向に変化していった。本論文はこれを、プロテスタントが普遍的理念に目覚めた結果としてではなく、特定の状況下での複数のエージェントによる政治的な産物として描き出している。

第1章では反カトリシズムを類型化し、反移民運動としての反カトリシズムと、宗教批判としてのそれを分けることで、後者が「信教の自由」概念の理解に影響を及ぼしていくことを示した。第2章ではプロテスタントとカトリックの間の争点であった、学校問題と教会財産問題に着目し、当時の「(信教の)自由」概念の多義性・流動性を分析した。第3～5章では宗教批判としての反カトリシズムを代表する「内外キリスト教連合」というプロテスタントの伝道組織に焦点を絞り、カトリックを改宗させることと、「信教の自由」をアメリカ的＝プロテスタント的価値として自認し広めることがなぜこの団体において両立したのかを詳述した。

本論文は豊富な一次資料に対する手堅い読解に基いた、細部にわたる叙述を真骨頂とするが、他に評価できる点として、①内外キリスト教連合という有志団体を対象とするユニークな手法から生まれたダイナミックな叙述の展開、②米国と欧州の関係（環大西洋圏）を含む視野の広さ、③宗教史、政治史、移民史、文学史に跨る学際性、④「信教の自由」に関する最新の研究動向を踏まえた上で独自の貢献をなす積極性、⑤今日のイスラム移民排斥問題への問題提起力などが挙げられる。従来、アメリカ宗教史はプロテスタント史、カトリック史というように宗教・派別に叙述されてきたが、マジョリティ・マイノリティの相互関係という観点から「信教の自由」史をとらえ直すという試みも本論文の斬新さである。さらに言えば、米国内の研究者が自身の所属するエスニック集団の歴史を専門とする傾向があるのに対し、本論文がその枠を超えた歴史叙述を実現しているのは、日本で研究を遂行することを強みに転換したことを示す。以上のことから本審査委員会は、本論文を高く評価し、博士（文学）の学位を授与するに相応しいものと判断した。